

坂に見し街へ入りゆく秋の暮

藤田湘子

小高い丘の上から坂を下つてゆく途中、眼下に広がる街の夕景が見える。秋夕焼と、空にはまだ青空が残り、暮れ始めた街中の所々に灯がともる。かすかな傾斜に体の軸を保ちながらゆつくりと歩を進める。目の前に街の家並みが見えるような近さと高さの坂であろう。

湘子二十四歳の作。戦後の彷徨の後、東京鉄道教習所に勤め職員無料パスの恩恵に与り、句会や吟行に積極的に参加をしていた頃である。八王子に仮寓していた師、秋櫻子を慕って、毎月自宅に投句用紙を持参していた。八王子の「喜雨亭」の裏には「加住の丘」があつた。

湘子は「坂が好きである。少年の頃から、将来は坂のある町に住みたいと思つていた」と自解に書いている。

1950年(25歳)第一句集『途上』 鑑賞・野本京